

?と!が生まれる 自然環境

園庭に完成した小川に放した生き物にかかわっていったことで、子どもたちの自然に対する思いはどのように変化していったのでしょうか。

監修=大澤 力(東京家政大学教授)

自然を取り込む園庭作り vol.9

よきよき自然環境を保つために

執筆=内野彰裕(東京都・東京ゆりかご幼稚園園長)

園庭にすんでいたヒキガエルが暮らしやすいよう、園児や保護者と一緒に行った「里山ガーデン」の小川(4月号P.9参照)。作業の中心を担った5歳児が、近くの川で採取してきた生き物たちも、小川で元気に育ち、徐々に豊かな生態系が形成されていきました。

小川で魚を探し、捕まえ、観察して、また園の小川に放すなど、生き物とのかかわりが繰り返されるうちに、生き物に対する理解はもちろん、命に対する慈しみの気持ちも一層深まっていきました。「魚たちが暮らす環境をよくしたい」と、毎日、外あそびの最中に小川に立ち寄り、春には川面を覆い尽くす桜の花びらを、秋には落ち葉を取り除くなど、生き物のすまいに気を配る様子が子どもたちに見られるようになりました。

また、年末の大掃除では、たまったヘドロや落ち葉を取り除き、石や砂、土に光を当て空気を入れるため、小川と池を約1か月の間、空っぽの状態にします。同時に、生息する生き物の調査を行い、この間は生き物を別の場所に移して観察をします。5歳児が川からヘドロを外にかき出し、ヘドロに混ざっている魚、シジミ、カワニナ、ヤゴ、サワガニなどを丁寧にみつけて移していきます。手がかじかむ寒さのなかですが、子どもたちは1匹も残さず生き物を探し出そうと一生懸命です。

こうした5歳児の姿を、3~4歳児も見ながら育ち、年度末には5歳児が後輩たちに小川の管理や清掃、生き物の世話を伝授し、その精神と方法が代々受け継がれていくようになりました。



ある程度小川の水をポンプでくみ出した後は、生き物を網で捕獲。



かき出したヘドロのなかも丁寧に探ると、サワガニなどが隠れている。



捕獲されたヤゴやアブラハヤ、モエビなど。

すっかり水のなくなった池。水底にあった石も、ひとつひとつ日に当てる。



生き物たちは、1か月間、こちらで仮すまい。どんな生き物が育っているかわかるよい機会でもある。

※このページでは、「いつでも自然とふれあえる園庭」を目指して、保護者と子どもと保育者で園庭改造に乗り出した東京ゆりかご幼稚園の実践を、1年間ご紹介いたします。来月は「園庭の小川が感性を育てる」です。